



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	みどり, 景観, そして観光へ : 「ガーデン・シティ札幌」を例に
Author(s)	中林, 光司
Citation	CATS 叢書, 11, 357-363
Issue Date	2017-03-07
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/66655
Type	departmental bulletin paper
File Information	CATS11_47.pdf



みどり，景観，そして観光へ

「ガーデン・シティ札幌」を例に

中林 光司

現札幌市建設局みどりの推進部みどりの管理課

／北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院観光創造専攻 博士課程

はじめに

札幌は「ガーデン・シティ」です。文字どおりの意味で都市公園数が全国 1 であり，都市公園面積が全国 2 位，身近な場所に魅力のある大型公園が配置され，市域の 63% が森林であるという事実からも異議が無いところです。また他の視点から見ると，あまり知られていませんが，開拓期から行政がみどりを保護し，公園を計画配置するなど都市計画立案の基盤として位置付け，実践してきた積み重ねが，まちの形状，景観，範囲を決定し発展に寄与した事実が「ガーデン・シティ」として定義づけられ，地域資源と考えられます。

一方全国各地では地域資源をまちづくり，「まちの顔づくり」に活用する取り組みが行われていますが，成功事例と言われる他地域の都市計画，景観や手法を真似した結果，これまで受け継いできた歴史や文化が作ってきた「まちの顔」を失うといった失敗事例も多いといえます。札幌も同様に都心部には魅力的な資源が失われつつあり，官庁街，オフィス街，商店街がともに平凡な建築物と貧弱な緑化に置き換えられ，わずかに時計台，大通公園などが文化資源として認知され，本格的な開拓から 150 年を経過した現在，せっかく先人が貴重な財産を残してくれたにもかかわらず，魅力ある「まちの顔」を示してはいません。

さて，一般的に都市の魅力を再発見するためには，都市発展ストーリーや都市計画によるまちづくりの過程も重要であり，札幌においては都市軸の大通公園と創成川，明治期に配置計画された大型公園や街路，先進的な大正・昭和初期の都市計画決定などを知ることによって，見落としがちな平凡な資源が価値ある遺産やストーリーに蘇り，札幌の魅力の向上につながると考えられます。

この小文では寄附講座 10 周年にあたり，観光学高等研究センター(以下，CATS) が位置する札幌において，まちづくりにおける官民の分断というネガティブな面に始まり，それらのみどりを生かしながら解消し，国内有数の市民国際交流のまちに成長した経緯を述べます。また，未来に向け，国内外に対するみどりのまちづくりや観光の発信・受信の拠点となるための新たな観光創造を考えていきたいと思います。

1. 札幌の開拓とみどり

(1) 札幌の開拓及び建設

現在の札幌市域が確定する前に、1955 年（昭和 30 年）まで二つのサッポロがありました。1866 年（慶応 2 年）に大友亀太郎¹⁾ が二宮尊徳の理想を持って幕府主導により日本人が独力で切り拓いたフロンティアの地である現在東区の一部「札幌村」と、明治 2 年に明治新政府が主導し、日米両国の叡智が生み出し両国のフレンドシップによって、生み出された理想のフロンティアの地としての中央区の一部「札幌本府」の 2 つのサッポロがありました。

札幌村は当初御手作場と呼ばれ、その実践において二宮の教えである「農民に改善の自覚、人の意思を重んじること」を挙げ、「サッポロ」は理想を掲げたまちとして出発したことがわかります。大友の入地後、特筆されるのは大友堀の開削です。豊平川の支流を水源とし、南三条橋から直線で北六条に至り、そこから東北に折れ伏古川に注ぐ 4 km 余りで、北 6 条までの直線部分は現在創成川の一部になっています。重要なことは、この大友堀が、島判官が円山から望み、本府の計画を立てる基線となり、みどりのまちづくりの出発点となったことです。

(2) 札幌本府と大通の誕生（官民の分断と最後の城下町）

札幌本府建設当初案は、1869 年（明治 2 年）開拓使判官であった佐賀藩士の島義勇が考え、図 1 のように官衙は北側に、町人街は南側に配置し、特筆すべきは、その間に大通を

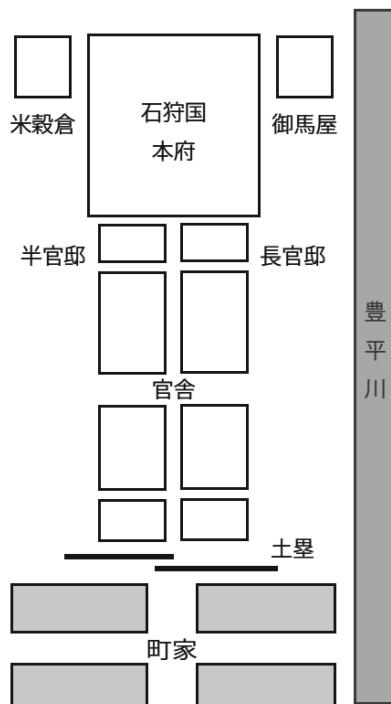


図 1 石狩国本府指図（略図：『図集日本都市』「9-6 開拓都市・札幌」より中林作図）

配置するとともに、土塁を設置したことであり、宮本は札幌を最後の城下町として位置づけています²⁾。土塁の設置に関して、筆者はこれを、大通を隔てて南側に存在する内なる庶民層に対しての備えであると考えます。幕末維新の戦乱で箱館戦争も終結したばかりの殺伐とした空気の中、民間側からの反乱が起こる可能性に備えたものであり、箱館の五稜郭などと異なり、専ら外敵と戦う近代戦のための砦ではなく、内政を考慮に入れた最後の城下町であり、つまり、このような官民の分断からまちづくりは始まったということがわかります。

さらに札幌本府では、明治期においても政治、経済、都市計画の実務は武士階級があたり、宮本が指摘したように江戸時代の武士の時代が去った後に、最後の武士がつくったまち、城下町として位置づけられるのです。なお、実際に本府の建設が始まってからは、民心が安定していき土塁は地図上無くなっています。1871年（明治4年）には、大通が大友掘と直交する形で東西に町人街から官衙への火防を目的に幅58間（105m）の道路として整備されましたが、火防線として位置づけられたため、意識の上でも官民の分離は解消されませんでした。

市民の憩いの場として大通が姿を現し出したのは、1876年（明治9年）に西3・4丁目の2区画に西洋花を植栽し「大通花草園」としたのが始まりです。

（3）開拓時代の自然保護（今残っている身近な自然の由来）³⁾

札幌近郊では公共事業用材、移住者の家屋や暖房の薪の必要性から無秩序な伐採が行われたため、1871年（明治4年）に一部樹種の伐採禁止、明治6年に「官林」を定め樹木や山林の保護をしました。特に藻岩・円山の自然について黒田清隆開拓使長官が心配し、その指示によって保護され乱開発は免れたものの、開拓使廃止後規制が緩和され官林面積は1915年（大正4年）には3分の1に激減しました。曲折を経て1921年（大正10年）に北海道第1号の国の天然記念物に円山原始林・藻岩原始林として指定されたこれら自然に対し、現在は市民の保護意識も高く、生物多様性の宝庫として、またレクリエーションや観光の場として、都心から望むことが可能な「みどりの屏風」を構成し都心のみどりの少なさを視覚的に補うものとして親しまれています。こうした自然と人間が近距離で共生する都市は世界的にも稀といえ、まさに世界に誇るべき価値あるこの財産を残してくれた先人たちに対し筆者は多大な感謝をしています。

（4）開拓時代の公園計画と都市計画（中心市街地の骨格形成）⁴⁾

札幌には、日本の公園第1号を横浜山下公園と函館公園との間で争っている公園があります。1873年（明治6年）「太政官布達」によって公園制度が始まり、それ以前1871年（明治4年）に作られた「偕楽園（現北区）」です。残念なことにほとんどの用地は財政難によって売却され、当時の面影は現在では清華亭⁵⁾を残すだけですが、2013年（平成14年）に一部買戻し偕楽園緑地として公園化しました。また北海道庁長官の岩村通俊は在任

中に「北は偕楽園、南は中島、西は円山、東は苗穂に公園を設け、その間を市街となす」⁵⁾と、公園の配置計画を語っていましたが、残念にも苗穂公園だけは実現しませんでした。当時の市街地計画として中心部に大通と創成川、東西南北に大型公園など、みどりの配置により現在の中心市街地の骨格と範囲が定まりました。

2. 札幌の都市計画法の適用とみどり・公園^{6) 7)}

(1) 都市計画法の適用前後（みどりを尊重した市街地の拡大と官民の分断から交流へ）

大通が交流の場として姿を現したのは、1907 年（明治 40 年）に市民が自費で芝生と花壇を整備し、続く市民が 1916 年（大正 5 年）に自費で花壇を造成しその後行政に管理を委ねた頃と考えられ、官民協働がなり火防線から民間人が憩う逍遙地として成長しました。札幌の近代的公園整備が本格的に行われたのは、東京市の技師長岡安平に依頼し、明治 42 年（1909）に円山公園（札幌神社参拝後のリクレーションやピクニックの場であり、江戸時代の庶民の楽しみ方と近似）、1910 年（明治 43 年）中島公園（小川沿いに料亭ができ風情やスポーツを楽しむ場）、1911 年（明治 44 年）に大通火防線に公園設備を設置し逍遙地（現在の大通公園、都心でおしゃれをして散策を楽しむ場）が完成した時期であり、明確に市民の憩いの場・交流の場である「ハレ」の場として成長しました。

その後、1919 年（大正 8 年）都市計画法が施行され、札幌での適用は 1923（大正 12 年）になり、1936 年（昭和 11 年）に最初の都市計画街路を決定しました。創成川や新川など都市河川を積極的に取込み、広幅員街路の植樹帯オープンスペースの一部に含め、街路計画と公園緑地系統を一つの思想のもとにネットワークを形成する極めて先駆的な思想でした。また、郊外の発展に伴い風致景勝地の荒廃が進んだことから昭和 14 年（1939）に対処するため風致地区を決定し、大通逍遙地ほか 13 地区を指定しました。札幌の都市計画は、街路、風致地区、公園が密接に関連したきわめて先進的なものでした。1942 年（昭和 17 年）から翌年には、都市計画公園が 5 か所決定されました。残念なことに第二次世界大戦後には財政難や農地解放等により、広幅員街路や風致地区で廃止されたものや、公園の面積減少も多くありますが、その後の都市計画においても公園みどりや河川が尊重され、まちづくりの骨格を担っています。

(2) 第二次世界大戦後の人々を元気づけた花みどりや公園

戦後復興は小公園から行われ市街地の拡大とともに身近な地域の骨格として、小公園が確保されていきました。大規模公園の復興について、特筆すべきは大通公園で、戦中戦後の殺伐とした時代のなか畑になり、その後米軍に接収され荒廃が進みましたが、1950 年（昭和 25 年）第 1 回札幌雪まつりが開催され中学生や市民によるまちの活性化がはじまり、さらに市民調査（1949 年）で花壇復旧の声は大きく、札幌市は 5 か年計画で芝生と花壇の復旧に取り組み、1952 年（昭和 27 年）には園芸店、造園業、生花店が共同で花壇づくりを

行い、1954 年（昭和 29 年）に花壇コンクールに発展し「札幌市花壇推進組合」となって現在に至っています。一般市民やこの方たちのたゆまぬ努力があり、敗戦で心が沈んでいた札幌市民はまちを活性化し、春には心を躍らせ花を育て、夏には世界でも屈指の花のまちを演出し享受する楽しさを知ったのです。なお円山公園では 1951 年（昭和 26 年）動物園の開園、1954 年（昭和 29 年）全国国民体育大会開会式、中島公園では 1949 年（昭和 24 年）からスポーツ施設建設や全国国民体育大会などにより市民を元気づけていきました。

（3）環状夢のグリーンベルト構想（無秩序な市街地拡大抑制と文化的景観群の形成へ）

この構想は完了していますが、1982（昭和 57 年）から、緑のネットワーク形成を図る目的で、市街地周辺に環状大規模緑地を確保し、併せて無秩序な市街地の拡大を抑える効果も期待した都市計画の一つです。札幌市の周囲に広がる手稲山・藻岩山・野幌などの森林緑地保全と、平岡公園（ウメ）、川下公園（ライラック）、石山公園（アート・札幌軟石）モエレ沼公園（アート作品・イサム＝ノグチ）、前田森林公園（カナール・ポプラ）、サッポロさとらんど（農業公園・なりわい）、百合が原公園（ユリを中心とする花の総合公園）など郊外に大規模公園を造成し、それぞれに代表する樹木・花・アート・地形により特徴を持たせました。筆者は将来年月を経て樹木や花木、建造物が品格を備え、さらに市民が携わる事によって価値を増し、文化的景観群として成長していくものと考えています。

3. これからの「ガーデン・シティ札幌」と観光創造へ

以上述べたように札幌は単にみどりが多いだけでなく、みどりがまちづくりの骨格を支えてきた「ガーデン・シティ」であることが理解いただけたと思います。札幌は日本で数少ない計画都市であり、その計画の手法でも類まれな自然・人工両者のみどりを利用してきましたが、現在我々は、先人が残したこの貴重な遺産を食いつぶしつつあると感じています。大通は官民分断政策から生まれましたが、行政市民のたゆまぬ努力により時を経て交流の場に発展しました。しかし現在の政策において経済に目が行き過ぎ、今や市民が安らげないイベント会場に成り下がっており、市域にある行政の新建築でさえみどりの伝統を忘れた貧弱なみどりを多々見せつけられます。翻って東京や米国大都市では緑化による資産価値の向上が図られ、それに伴ってアメニティが確実に向上しています。札幌でも官民協働で作った交流の場を代表する大通花壇のように古きを訪ね新しきを知る「ガーデン・シティ」ストーリーに立ち戻ると、自ずと将来設計が見えるはずです。希望ある一例として「札幌市北 3 条広場」の整備があります。この通りは旧赤れんが庁舎に通じるブナの木ブロック舗装の街路で、当時植栽したイチョウの 9 割が現存しています。2011 年（平成 23 年）に赤レンガ舗装で広場に改修しましたが、「ガーデン・シティ」ストーリーを生かしたシンプルなデザインと品格のあるイチョウにより好感が持て、利用者の人気も高いと聞いています。このように原点であるストーリーを生かし、シンプルで且つみどりを基

調にした官民協働のまちづくりに立ち戻ると魅力ある資源に蘇ると考えています。

筆者は修士論文において、札幌は米国と日本のフレンドシップによって作られたまちであると論じ、米国人や新興国のヒントを提供する場として観光誘致に生かすべきと述べましたが、さらに札幌は開拓期の米国からの指導だけでなく、都市計画法や大規模公園建設を依頼した技師のように海外の法や事例を広い視野で学んだ人々の成果を真摯に守ってまちづくりが行われました。この経験、つまり「ガーデン・シティ」ストーリーに基づくみどりによるまちづくりの軌跡を、国内外に向けたスタディ観光として発信するだけでなく、新たなまちづくりの情報を全世界から受信し、より良いまちとして、またさらなる交流の場として発展するための新たな観光創造を提案していきたいと考えています。

最後に、筆者は造園技師として公園の計画・設計・建設・管理やまちづくりをしてまいりましたが、CATS と出会うことができ、そして JR 東日本、JR 北海道の皆様がその CATS および観光創造専攻を支えていただいたおかげで、広く知識を得、広い視野からものを考える機会をいただきました。ここに感謝の意を示して締めくくりたいと思います。

注

- 1) 大友亀太郎 (1834-1897)：相模国大友村（現神奈川県小田原市西大友）に農民の子として生まれ、二宮尊徳の孫弟子として門下に入り、仕法を学んだ。蝦夷地開拓の幕命を受け札幌の開拓を行った。
- 2) 「図集日本都市 (1993)」 「9-6 開拓都市・札幌」参考
- 3) さっぽろ文庫 12『藻岩・円山 (1980)』 「藻岩・円山の歴史」参考
- 4) さっぽろ文庫 64『公園と緑地 (1993)』 「公園のあゆみ」参考
- 5) 清華亭：1880 年明治天皇の北海道行幸（ぎょうこう）の際の休憩所として和洋折衷で現在地札幌市北区北 7 条西 7 丁目に建築された。開拓時代の代表的な建築物で現在も建築時と同じ場所にあり、開拓使のマーク五稜星が刻まれている。一時期、民間に払い下げられていたが、保存のために市民有志の寄付金によって札幌市へ譲渡された。
- 6) 『札幌のみどりづくり (2001)』参考
- 7) 『札幌のまちとともに歩んだ公園 (2011)』参考

参考文献

越澤明編

2001『札幌のみどりづくり』札幌市

岩崎敏夫

1970『二宮尊徳の相馬仕法』錦正社

宮本雅明

- 2005 『都市空間の近世史研究』中央公論美術出版
小野洋一郎
- 1986 『報徳の人 大友亀太郎』北辰堂
(社)日本造園学会北海道支部監修
- 2011 『札幌のまちとともに歩んだ公園』札幌市
札幌市教育委員会編
- 1980 さっぽろ文庫 12 『藻岩・円山 (1990)』
- 1989 『新札幌市史第 1 巻』札幌市
- 1990 さっぽろ文庫 50 『開拓史時代』北海道新聞社
- 1991 『新札幌市史第 2 巻』札幌市
- 1993 さっぽろ文庫 64 『公園と緑地』北海道新聞社
高橋康夫、宮本雅明他
- 1993 『図集日本都市』東京大学出版会